

ISSN 0919-0120
2003. 7 No.44

豊田市
郷土資料館
だより

No.44

Toyota City Museum
Of
Local History



銅鏡(右・豊田大塚古墳出土品と左・模造品)

目次

- ・企画展「古代のきらめき—出土品に見る金属加工技術—」—— 2
- ・松平八代歴史サミット報告—— 3
- ・鈴木正三の袈裟—— 4
心のふるさと 無形民俗文化財
- ・とよたのオマント—— 5
- ・法興寺阿弥陀如来立像特別公開—— 6
- ・平成14年度事業報告—— 7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース—— 8

三累環頭大刀柄頭(山ノ神古墳)と耳環

「古代のきらめき-出土品に見る金属加工技術-」

と き：平成15年7月19日(土)～8月31日(日)
9:00～17:00 月曜休館(祝日は開館)
ところ：郷土資料館第2展示室
観覧料：無料

今回の企画展は、ご覧いただくにあたり多少の想像力が必要な展示内容です。というのも、題名は「古代のきらめき」としてありますが、今回の展示の主役は、長い間土に埋もれ、錆に覆われた金属製品です。したがって、それらが本来持っていた輝きを見つけるには、錆の向こう側を注意深く観察する必要がありますからです。

ただし「古代のきらめき」は、金属の輝きを指すだけの題名ではありません。錆に隠れてはいますが、金属を加工する技術も今回の展示の主役なのです。

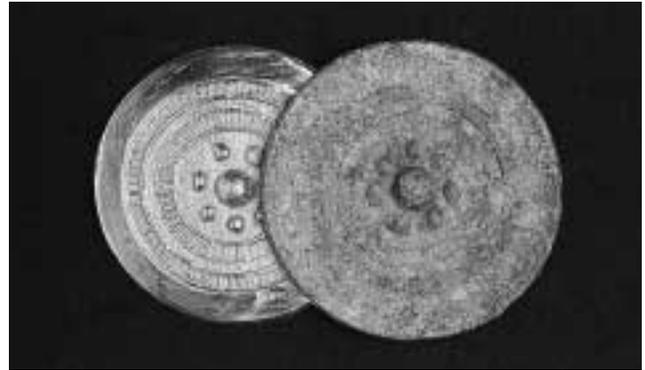
熱を加えると柔らかくなったり、溶解したりするなどの金属の性質を利用して、人間は各種の器物を作り、利用してきました。しかし、天然の鉱石などから金属を取り出す精錬をはじめとして、形を作り出す鑄造や鍛造、彫金やめっきなど、金属から器物を作りあげるには、大変高度な技術を必要とします。現代においても、金属加工は最先端技術の一つです。原始から古代の人々にとって、金属の輝きを生み出す技術もまた、きらめいていたに違いありません。

展示では、豊田大塚古墳から出土した遺物を中心として、市内から出土した古代までの主な金属製品と、その金属加工技術について紹介します。そして、市内の南山畑遺跡で発見された弥生時代の鍛冶遺構(東日本では最古級)から出土した微小鉄片や、清須町の朝日遺跡から出土した青銅器鑄造関連資料など、県内の金属加工関連遺跡を紹介します。また、日本列島において金属器が使われ始めた弥生時代の資料として、愛知県内で出土した弥生時代の鉄器のうち、展示可能なすべての資料をご覧いただけます。

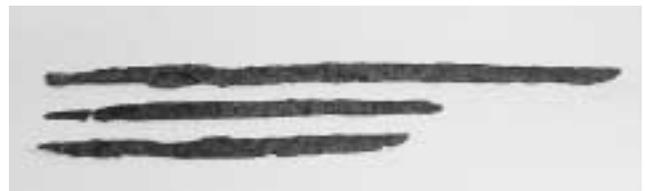
その他、展示関連遺跡の見学や鍛冶体験、青銅鏡の製作体験などの関連行事も開催予定[※]です。皆様におかれましては、是非ご来場いただき、錆に隠れた「古代のきらめき」を見つけ出していただきたいと思います。

(天野博之)

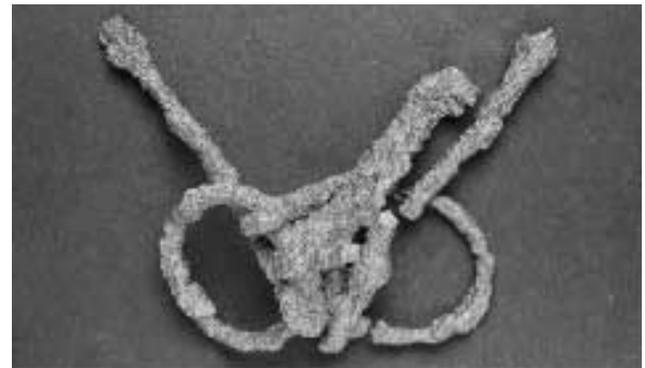
※関連行事については、別途チラシやHP上でご案内します。



変形獣文鏡(右・豊田大塚古墳出土、左・模造品)



鉄刀(豊田大塚古墳出土)
大刀(写真奥)の模造品も展示



馬具(豊田大塚古墳出土)



三累環頭大刀柄頭・筒金
(山ノ神古墳出土)



弥生時代の鉄鏃
(南山畑遺跡出土)

松平八代歴史サミットを開催

徳川宗家第18代 徳川恒孝氏をお迎えして

4月12日(土)に「松平八代歴史サミット」が開催されました。平成5年に開催された「松平親氏公600年祭」から10年目となる今年、子ども達にもその歴史を知ってもらうこと、松平の歴史を見直し、地域づくりへつなげていくことを目的として行われました。

今年は江戸開府400年にあたることもあり徳川宗家第18代当主徳川恒孝^{つねなり}氏をお招きし、松平太郎左衛門家、14松平(18松平)家のうち5家のご当主にも、松平の地にお集まりいただきました。

サミットのオープニングとして「歴史シンポジウム」が松平中学校を会場に行われました。あいにくの雨天でしたが、同校の生徒が全員参加をはじめ、地元松平高校の生徒、一般市民あわせて850人の参加を得ることができました。会場となった中学校体育館は空席もほとんどないほどでした。



基調講演：徳川恒孝氏

歴史シンポジウムは徳川恒孝氏の基調講演で始まりました。松平親氏が「天下和順」の願文のもと、この松平の地から徳川家康につながり、戦乱の世の終わりをつげたこと、江戸時代になって、長く平和の世が続き、その願文が実現したことなどが、徳川氏からお話がありました。

続いてのシンポジウムは「歴史を活かしたまちづくり」が主題でした。高月院田中祥雄住職をコーディネーターとして徳川氏、松平諸家をはじめ、中学生や高



シンポジウム

校生の代表、地域代表、豊田市中根助役等をパネラーに、たくさんの意見や提案がありました。中学生・高校生パネラーからは「郷土の伝統芸能を広げたい」、「連歌の盛んな町に」、「産湯駅伝」などのユニークな提案や、「あいさつ運動」、「ごみをなくそう」、「地域全体で仲良く」など、町への愛情が伝わる意見でした。

歴史シンポジウムに続いては、会場を松平郷に移し「交流会」が行われました。交流会では松平の郷土芸能「棒の手」、「松平わ太鼓」、「新松平音頭」の披露のほか、バザーも実施され、大勢の方が交流会に参加されました。



交流会

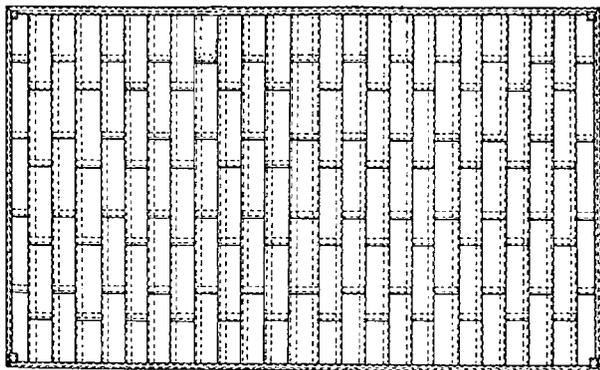
当日の夕方から行われた恒例の松平東照宮例祭の試楽では、徳川氏も10年ぶりにお水取りをされ、厳粛な神事も一層盛り上がるものとなりました。春の陽気に恵まれた翌日の本楽は、神輿御渡^{みこしとぎょ}に徳川氏、松平諸家の方々も参列され、祭りの見学に訪れた観光客の皆さんも、めずらしい光景を楽しんでみえました。

鈴木正三の袈裟

鈴木正三^{しょうさん}は、天正7年(1579)三河国加茂郡則定^{のりさだ}(現足助町)の武士・鈴木重次の長男として生まれました。父と共に徳川家康に仕えましたが、元和6年(1620)42歳(数え年)で出家しました。諸方に仏法を求め、各地を旅して修行を重ね、豊田市中町の恩真寺を創建しました。正三は宗派にとらわれず独自の思想を展開、人々が日常生活において各々の職業に励むことこそが仏業であると説いた事で知られています。

現在、豊田市郷土資料館では、正三の遺品を20点預かっています。このうち「正三の袈裟」について紹介します。

「正三の袈裟」と伝えられているものは、2点あります。1点は、「七条割截衣^{しちじょうかつせつえ}」と呼ばれる形式の濃い茶色をした麻の袈裟、もう1点は「二十五条割截衣」と呼ばれる形式の薄茶色をした麻の袈裟です。この七条、二十五条は、縦割りの布の数をいい五条から最大二十五条まで奇数条の11種類あります。割截衣は、反物を長・短の布片に裁ち切って縫い合わせたものをいいます。

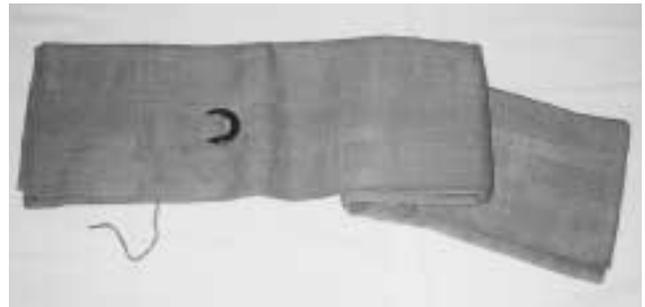


縦に5枚の布からなる1条が横に25ある二十五条割截衣

1条、1条の繋ぎ目^{つな}は二重になっており、部分的に縫わずにあけてあります。さらに「二十五条割截衣」の方は、布が重なっていない部分は、あて布が施され^{ぞう}雑巾刺^{ざんざし}(刺し子)になっています。小さな布を1つ1つ手縫いで縫い合わせていく作業は、相当の時間と労力を要するものであると想像できます。

また、この2つの袈裟はいずれも糞掃衣^{ふんぞうえ}という種類に入ります。これは糞掃なる布、つまり塵やゴミのような布、あるいは掃き捨てられた布で作られたものという意味です。こうした布は一切の欲を廃したものであり、仏の心に通じるという考えから糞掃衣は最尊最上の袈裟とされています。

「袈裟」というと、私たちは単に僧侶の衣装という程度の認識しかありません。しかし本来袈裟は、「仏心」・「仏身」さらには「仏法」そのものであるとされているもので、釈迦は袈裟について様々な決まりごとを設けています。ですから僧侶にとって釈迦の教えに基づいて一針一針袈裟を縫う事は、仏の修行の1つでもあったのでしょう。



「二十五条割截衣」

こうした視点で「正三の袈裟」を見てみると、2点とも釈迦の教えにのっとった袈裟本来の姿を伝えるものであることがわかります。正三は、当時の宗派の枠からすれば異端児のようにいわれていますが、袈裟1つをとっても釈迦の教えをきちんと勉強し、実践した僧侶であったことがわかります。また、こうした正三の姿勢を知る時、彼の独自の宗教観は、釈迦の教えに立ち戻ったところから生まれた思想であったのではないかと考えることができます。



「七条割截衣」

この袈裟を正三自身が縫ったのか、弟子が縫ったのか、または多くの僧の手を借りて縫いあげたものなのかわかりません。しかし、一目一目乱れることなく丁寧^{てい}につながる縫い目は、正三の人柄をも現代に伝えてくれているかのようです。

(伊藤智子)

※参考 『袈裟の研究』『袈裟のはなし』(2冊とも久馬慧忠氏著)

とよたのオマント

日本に馬が現れたのは、朝鮮半島からさまざまな技術や文化がもたらされた古墳時代という説があります。

5世紀以降の古墳から馬具や馬形埴輪が出土することからも、人と馬との関わりは古く、当時は物資の輸送手段というよりも、富の象徴であるとともに、戦闘時などにおける上層階級の乗り物として大切にされていたことは想像に難くありません。寺社に馬を奉納する風習もこうした戦勝祈願の儀式などとして始まったものと考えられます。

馬の祭りは、流鏑馬をはじめとして、東北のチャグチャグ馬コや相馬野馬追い、鹿児島島の馬踊り、岐阜の花馬祭り、三重の上げ馬神事など様々な形で全国に分布しています。

愛知では、「オマント」あるいは「オマントウ」、「馬の塔」などといわれる献馬があり、標具をはじめとする豪華な馬具を纏った馬を寺社に奉納する行事が尾張から西三河一帯にかけて広く行われていました。

オマントでは、馬は神様の乗り物とされ、馬の背に飾られた標具は山車と同じで、神が降りる神聖な依代を意味します。オマントは五穀豊穡祈願・祈願成就だけでなく、旱魃の際には雨乞いのため奉納されたともあります。

かつては県下で広く行われていたオマントも交通事情などの社会情勢の変化によって馬が激減し、現在行われているところはわずかになってしまいました。

オマントの大きな特長は馬を飾る豪華な馬具です。



四郷 八柱神社の献馬

毎年10月第2土・日曜日に棒の手とともに奉納されています

標具や標具巻、駄負、泥障、首鎧、鞍などには見事な錦の刺繍が施され、本来は泥除けである泥障にも「牛若丸と弁慶」や「渡辺綱と大江山の鬼」などの武将、龍や虎といった神獣などを題材にした絵画がいきいきと描かれています。



猿投祭りの合属

猿投祭りの隆盛期には、尾張・三河・美濃から186村から献馬や棒の手の奉納が行われました。

熱田神宮などの特定の寺社には、近隣の村々が合同で献馬するものがあり、これらを合宿(合属)といいます。市域においても猿投神社をはじめ六所神社や知立神社でもこうした合宿献馬が行われていました。

献馬には村の威信がかかっており、馬飾りの豪華さを競うだけでなく、奉納の際に他村との争いが起きることもありました。その攻撃から馬を守るために棒の手や火縄銃が警護としてつくようになり、猿投祭りが別名「警固祭り」とも呼ばれる所以です。

とよたの歴史や文化を今に伝えるオマントは、後世に残したい民俗行事のひとつです。

(蟹 一夫)

◎参考文献

豊田市史 5 民俗

高岡村誌

坂上町誌

愛知の民俗芸能(文化財図書刊行会)

郷土の棒の手(豊田市棒の手保存会)

愛知の馬の塔と棒の手沿革誌

(愛知県棒の手保存連合会)

法興寺阿弥陀如来立像・胎内納入品特別公開

昨秋、豊田市加茂川町の法興寺(真宗大谷派)で本尊仏である阿弥陀如来立像を修理に出し、塗りを剥がして解体したところ鎌倉時代後期の制作であることが判明し、胎内から文永4(1267)年の奥書のある**仏説阿弥陀経**1巻と**印仏**13点の納入品が発見されました。発見以来、愛知県史編さん委員会文化財部会、中世部会の協力をえて、調査がすすめられてきました。このほど概要が明らかになったので法興寺の格別な配慮で6月7日から同22日まで本館において特別公開をしました。この間592人の来館者がありました。

阿弥陀如来立像は、像高79.4、面幅8.9、胸幅14.3cmで、**桧材による寄木造、内刳、肉身金泥、衣漆箔、玉眼。螺髪が整然とし、髪際の中央が下がり、低めの肉髻、両脚間の衣文はY字状をなし鎌倉時代の特徴をよく伝えています。**



木像阿弥陀如来立像

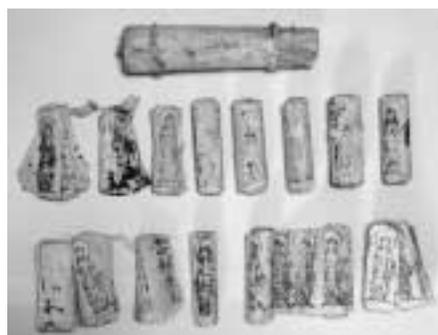
いつの時代、だれによって法興寺にもたらされたかは伝えられていません。

仏説阿弥陀経は、縦14.8cm、横323.3cmの卷子です。他の料紙に書かれていた平仮名文字を一字ずつ切り取り、別の料紙に一字ずつ糊で整然と貼り合せて経文を構成しています。1行に16~18文字貼られていて、経文202行、墨書の奥書3行があります。奥書に「南无西方極楽記主後生たすけたまふ文永四年二月廿七日」と記されています。筆、作者は不詳ですが、筆者の没後、筆者に近い人物が生前中の文字を集めて経文を作り、死後の安楽を願ったものと思われます。ほとんど類例がないといわれ、きわめて重要な発見です。



仏説阿弥陀経

印仏とは木版で紙に捺印した仏像で、13点あります。卷子と短冊形の二つのタイプがあります。卷子は縦7、径2.5cm前後で7巻。横長の紙に阿弥陀像を連続して捺印し、何枚かを巻いて紙帯で結ばれていました。短冊形は縦6.5cm、横2.5cmほどで、6組、1組は25~100枚。捺印された阿弥陀像を1体ずつ切り離し、束ねて糸で綴じられていました。いずれも裏面に墨書があり、「弘安二年」、「蓮念御房」、「當願衆生」、「五貫文」などの字句がみられます。反故紙を利用したのか、木像あるいは**印仏**とどのように関わるかは現段階ではわかっていません。



仏像の胎内から発見された納入品



印仏(卷子)

卷子の**印仏**6巻は未調査であり、今後の調査と研究に期待がよせられ、あわせて専門的な保存措置が検討されます。

700年前の人々の安らかな死後を祈る気持ちがそのまま伝えられてきたことに、驚きをおぼえざるをえません。
(松井孝宗)

平成14年度郷土資料館の事業

1 文化財保護審議会

審議会(4回)開催

史跡整備状況視察研修(青塚古墳、小牧山、どんでん館)

文化財防火デー(永福寺、守綱寺、隣松寺)

豊田加茂教育事務所管内審議会委員研修(愛知県陶磁資料館、定光寺他)

2 文化財指定

長篠・長久手合戦図屏風 六曲1双



長篠合戦図屏風



長久手合戦図屏風

3 展示

年間入館者 7,812人

特別展

「川をめぐる暮らし」

11月2日～12月15日 入場者数 1,106人

併催事業・矢作川の源流を訪ねるツアー

企画展

① 「とよたの近代産業遺産を訪ねる」

7月20日～9月1日 入場者数 1,352人

② 「大竹千明・光代夫妻コレクション展」

1月25日～3月23日 入場者数 1,393人

棒の手会館企画展 年間入館者数 11,435人

① 「猿投山の自然と風物」 5月24日～7月29日

② 「郷土資料館新収蔵品展」 12月7日～4月20日

4 修理事業

六鹿(市指定)改修工事

5 補助事業

守綱寺本堂(市指定)修理事業補助

長慶寺観音堂(県指定・木造十一面観音立像)収蔵施設防災工事補助

棒の手(県指定)、山車(県・市指定)、囃子(県・市指定)維持保存活動、郷土の先人顕彰事業補助

6 資料調査

未指定無形民俗芸能実態調査

史料叢書編集・刊行(鈴村家文書・中巻)

昭和史資料調査

加茂川町法興寺阿弥陀如来像・胎内納入品調査

7 埋蔵文化財

舞木廃寺(H13年度一部測量)、鳳面館跡範囲確認調査

古城遺跡(H12年度発掘・13、14年度整理・15年・16年度報告書刊行予定)

吉兼1号古窯(H13年度発掘・14・15年度整理・16年度報告書刊行予定)

敷田・切山古窯(S58年度発掘・14、15年度整理・16年度以降報告書刊行予定)

猿投古窯出土品整理(本多氏寄贈資料、市発掘未整理猿投窯出土品H14～16年整理・17年度以降報告書刊行予定)

梅坪遺跡報告書刊行(高宮公園用地・H13年度発掘・14年度整理)

滝1号、勘八2号墳報告書刊行(H8、9年度発掘・13年度整理)

8 史跡整備

百々貯木場跡測量調査(H13～16年度)

曾根遺跡再整備工事実施設計

9 資料購入

又日庵号書幅「艸玄」、渡辺綱光短冊、須藤しげる画双六、その他

その他

博物館実習生受入れ(6月)

夏・春休み歴史体験講座開催(勾玉、土偶、鎧作り、鎧試着体験)

総合学習支援(野見小学校他)

文化財施設耐震診断・補強工事設計

カワバタモロコは、モロコの名前を持ちますが、分類的にはコイ科ハエジャコ亜科ヒナモロコ属に属します。一般的に「モロコ」とは諸々の小魚を総称してつけられた名前です。

カワバタモロコは成魚になっても全長3～6cmの小魚で、矢作川水系のコイ科魚類の中では最も小さい魚です。小型で生息箇所も少なく、個体数も少ないことから、一般にはあまり知られていません。

カワバタモロコの形態は4つの特徴が挙げられます。側線が不完全で、前方のうろこ5～15枚に存在すること、口はななめ上を向いて開き、口ひげはないこと、尻びれの直前の隆起縁が、多種と比べて鋭いこと、一般的に雄より雌の方が大きくなることです。

カワバタモロコの分布域は、本州の中部以西、四国



文化財シリーズ

44

カワバタモロコ
(市指定文化財)

の瀬戸内海および九州北西部です。平野部の浅い池沼・ため池・小川などに住み、少数で群れを作って水面に近いところを遊泳する習慣があります。雑食性で、付着藻類や水生小動物など生息地の身近にあるものを幅広く食べています。産卵期は6～7月で、卵は水面近くの水草の葉や根に産み付けます。この時期の雄は美しい金色の婚姻色を表します。

かつては各地の池沼や小川で簡単に捕まえることができた魚ですが、開発などの生息環境の変化によって、最近ではその数が極端に減っています。豊田市内でも2、3の小さな池だけにしか生息しておらず、絶滅寸前の状態です。愛知県から保護種に指定され、豊田市でもウシモツゴと同様に天然記念物に指定して保護しています。

の数が極端に減っています。豊田市内でも2、3の小さな池だけにしか生息しておらず、絶滅寸前の状態です。愛知県から保護種に指定され、豊田市でもウシモツゴと同様に天然記念物に指定して保護しています。

資料館NEWS

●新刊図書のご案内

『梅坪遺跡Ⅶ』 1100円
第11次調査の報告書。鍔帯金具2点、竈祭祀遺構の紹介。

『滝1号墳・勘八2号墳』 1700円
矢作川流域で最も上流部に築かれた古墳の報告書。古墳文化の内陸部への浸透過程をみるうえでは、大変興味深い古墳です。滝1号墳は移築されました。

『鈴村家文書 中』 2500円
『鈴村家文書 上』に続く、挙母藩政下の町屋史料。東町の土地利用の様子や、挙母木綿生産・売買関係史料と共に、矢作川治水史料の他、明治初年の旅日記や記録など、人々の生活をもうかがうことができる。

『豊田市を先駆けた人々』 1300円

昭和初期から終戦時における挙母の様子と、トヨタ自動車創業者豊田喜一郎、町長中村寿一の事績を中心に紹介した図書。年譜・索引付です。

◎豊田市郷土資料館もしくは豊田市役所市政情報コーナーで販売中。当館のみ、郵送販売可(詳細はお問い合わせください)。

●博物館実習を行いました

6月26日～7月4日まで、博物館実習を行いました。県内外6大学からの参加者は9名でした。資料整理や展示など資料館の業務を実習しました。

利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始
入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.44■

平成15年7月25日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21
☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095
E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL: http://www.toyota-rekihaku.com